

アートとデザインの社会的活用についての研究 (2)

中西俊介

1. はじめに

現代の日本では地域社会のつながりの喪失や疲弊を起因とした様々な問題が私たちの日々の安心を脅かしている。そうした問題をアートやデザインの立場から考えなければならない時期に来ていると考えるクリエイターは多い。しかし、具体的に成すべき活動を見出せず、実際の行動に移せてはいない場合がほとんどである。だがそうした状況の中でも、一部のクリエイターは既に自分に出来ることを理解し、社会の中で活動を始めている。多くの場合、自らの活動を作品発表という形式だけではなく「コミュニティー・アート」という試みとして、創作や表現活動を共有する体験や場を通じ地元の交流や新しい関係作りを提案し、またそこに新たな価値観や楽しみと出会う機会を提供している。

また一方で、諸外国と比較して日本のクリエイターは社会に対して孤独感を持つ傾向が強い。そのため社会での分岐点といえる30歳前後で創作活動を断念することが多い。それが日本の美術やデザイン界の閉塞感に繋がっていると考えられる。しかし、クリエイター自らがアトリエを出て地域社会との接点を見出すことで、自らの創作活動の長い持続に繋がることが期待できる。

2. 研究の目的

近年、美術館や各種アートイベントに足を運ぶ人々が着実に増えている。また身の回りを見ても、日増しにデザインの重要性が高まっており、ものづくりが人々にとって身近なものになりつつある。次の段階として、日常生活の中にアートやデザインが無意識的に深く浸透し、それが全体に行き渡ったときに、本当の意味での豊かな社会が実現する。

本研究では、アートとデザインが地域社会において生活質の向上の一助として活用されること、そしてクリエイターにとって自身の社会での立脚点の確認という、双方に役立つ活動を「アートとデザインの社会的活用」と定義し、その分類や種類、及び方法を整理することで、地域社会とクリエイターの関係を向上させ推進することを目的としている。

3. 実施計画

3.1 研究の概要

本研究の調査の対象は以下に記す2点である。

(1) 日本におけるアートとデザインの社会的活用の現状調査

本研究者は2009年12月にドイツへの調査研究旅行を実施し、日本とドイツにおいての、クリエイターの社会的立場の差異に

注目した。日本と異なりドイツではアートについての社会的活用度が多く見られ、地域住民との親和性も高い。そこで日本の中でドイツの状況と類似した地域についての調査を実施し、日本におけるアートとデザインの社会的活用を探る調査を行う。

(2) アート・イベント「つながり/たがやす(京都国際文化祭)」の実施による運営内部からの調査

本研究者は2006年4月に「美術!生き残り塾」という、若いクリエイターと共に社会と表現の接点を考える私塾を設立した。現在、塾に所属するクリエイターは40名以上が在籍。各地域で展覧会やワークショップを行ってきたが、次のステップとして地域力再生をサポートすることを目標として掲げ、2010年4月に外部関係者との協働を計るため、塾の上部団体であるカルティベーション・パートナーズを設立し、同時にアートイベント「つながり/たがやす(京都国際文化祭)」プロジェクトをスタートさせた。表現者の社会的役割の明確化と地域力再生の一助を目的として、1. 滞在型スケッチ制作、2. 各種ワークショップの実施、3. 展覧会とイベントの実施、4. 広報誌の出版、以上の4つの活動を実施する。

3.2 研究方法

この活動を通して、アートとデザインの表現活動が地域社会に及ぼす影響に関する調査を行う。また実施主体組織の運営状況も含めたイベント実施マネジメントに関する情報も集積する。以上のような調査・分析を通して岡山という地方都市におけるアートとデザインのあり方を考え、地域に還元できるデータベースの構築を今後の検討課題としている。

4. 研究成果

(1) 日本におけるアートとデザインの社会的活用の現状調査
本年は、「3331 Arts Chiyoda」(東京都)、「軍艦島」(長崎県)、「瀬戸内国際芸術祭」(香川県)の調査を実施した。調査した3ヶ所はそれぞれ異なる切り口を持って社会と対峙している。

① 3331 Arts Chiyoda (東京都千代田区) (図1)

千代田区が廃校跡を活用し、アート活動の拠点として2010年6月にオープンした複合施設。情報配信、展示機能、イベントスペース、カフェ等、アート周辺領域を内包している。指定管理者である合同会社コマンドAが中心となり、31団体が入居して各々の社会的アート活動を多方面から行っている。その反面、地域住民との関わりは薄く、むしろ首都圏広域からの集客を目的とした運営であるといえる。

② 軍艦島（長崎県端島）（図2）

かつては炭鉱の町として栄え、日本の近代化を支えてきたが1974年に閉山。以来、無人島であったが、2009年4月より上陸が正式に解禁されると、全国より大勢の観光客が押し寄せている。特定非営利活動法人「軍艦島を世界遺産にする会」により上陸ツアーが行われており、最初の一年間で75,000人がクルーズを体験した。県内への経済波及効果は推計17億8千万円（長崎市文化観光総務課のよる試算）に上っており、負の遺産と思われた場所を新たな視点で観光地へと変貌させた。一過性のブームではなく、日本の高度成長を支えた文化遺産として、今後も一定の人気を維持し続ける可能性が高い。

③ 瀬戸内国際芸術祭 2010（香川県）（図3）

18の国と地域から75組のアーティスト・プロジェクトと16のイベントが参加した。最終的に1億円以上の黒字収支、来場者数94万人（当初見込み30万人）ということで、芸術イベントとしては大成功を収めたと言って良い。過去においても中国地方でこれほど成功した芸術イベントは例がなく、アートにより地域社会が活性化したことは間違いない。難解な現代アートをテーマに置きつつも、地域住民や一般客まで巻き込んだ運営は今後のスタンダードな事例となるであろう。しかし観客の多くが岡山県から訪問するのにも関わらず、今回の芸術祭に岡山県関係者の名前を見出すことはほとんど皆無である。その理由としては、1. 同時期に国民文化祭が開催された。2. 犬島以外の住所が香川県である。3. 実行委員長が香川県知事である。以上の3点であると推論できる。しかし地域に根ざしたアート活動を持続的に行うには関係自治体の協力が必要である。今後の岡山県の関わり方も模索する必要があるであろう。

（2）アート・イベント「つながり/たがやす」の実施による運営内部からの調査

本研究者が共同運営するカルティベーション・パートナーズが、次年度に行われる国民文化祭・京都のプレイベントとして、アートイベント「つながり/たがやす（京都国際文化祭）」を、京都市内と京都府和束町の2ヶ所を会場として実施した。これは都市部と過疎地という対照的な地域での活動を比較することで、活動内容や来訪者の構成等の差異を検討するためである。本年の活動数と内容（図4）は以下の通り。

- ・ 展覧会 10 回
- ・ ワークショップ 8 回
- ・ 機関誌発行 6 回
- ・ ライブペイント 2 回
- ・ スケッチ会 5 回
- ・ ギャラリー開設 1 ヶ所
- ・ アートバザール 2 回

京都市内では主に京都造形芸術大学の学外ギャラリー「art project room ARTZONE」（河原町三条下る）（図5）と商業施設「新風館」（烏丸三条下る）（図6）の2ヶ所をメイン会場とした。この場所は京都で最も通行人の多い商業地域であるため、イベントをするだけで観客が絶えない好立地であることが特徴である。その反面、観客の多くが目肥えた美術愛好家ではないため、理解しづらいものを展示すると全く反響はない。そのため、今回は「祭り」のイメージを持って各種のイベント（展覧会、ライブペイント、ワークショップ、機関誌配布等）を行った。

京都府和束町は宇治市に隣接する人口4500人程度の山村で、宇治茶の高級品種を栽培する茶所である。茶畑が京都府景観資産の第一号に選定されるなど多くの観光資産を持つているが、京都から公共交通機関で90分を要するため、茶業以外の産業が育たず、近年の過疎化が激しい地域（過疎地域自立促進特別措置法指定地）である。

この過疎地をクリエイターの力で少しでも活力を取り戻すために、地域性の高い各種イベントを実施した。まず、地域観光の拠点である、お土産販売所に隣接した茶倉庫を改造してギャラリーを開設し、集客の中心とした。その後、小学生を対象としたワークショップ（図7）や、和束町の住民を紹介したハンドブックを制作。また、来日したドイツ人アーティスト10名を伴ったスケッチイベントを開催し、そこで描かれたスケッチの展覧会を大阪の最高級ホテルや京都府庁で行うなど、和束町の認知度向上を目的とした活動を実施した。

5. おわりに

本プロジェクトは平成23年度国民文化祭京都のプレイベントの一環として実施しているため、京都府庁をはじめ、様々な方面に協力を仰ぎながら実験的なイベントを行った。

対象地域を2ヶ所に絞り、行政と地域住民を巻き込んだ活動を行った結果、地域に根ざしたアート活動を展開することができたといえる。その多くはワークショップと展覧会を中心とした活動で、本質的な精度の高さを伴ったアートとはいえない。しかし、住民（特に子ども）を「ものづくり」の入口まで誘導することが本活動の最大の目的であり、このような活動を通して我々のようなクリエイターの存在価値を社会的に高めていきたいと考えている。

また、国際交流も本活動と平行して行い、ドイツより10名の若手アーティストが2週間に渡って京都に滞在しながら制作を行った。京都造形芸術大学の学外ギャラリーで実施した「日独交流グループ展 MIT」は、様々な方面で話題となり、当ギャラリーにおける年度最多観客動員数を記録した。

本年度のプロジェクトの成功により、次年度に実施が予定されている「国民文化祭 2011 京都」に向けた展開に期待が持てる結果となった。



図1 3331 Arts Chiyoda



図5 日独交流展グループ展「MIT」(ART ZONE)



図2 軍艦島



図6 日独交流ライブペイント(新風館)



図3 瀬戸内国際芸術祭(豊島)



図7 和束町ワークショップ

2010/4/	会報紙「季刊」春号発行	2010/10/11	北野商店街秋祭り子供楽器演奏WS
2010/4/24, 25	アートバザール+ぬいぐるみ制作&アニメーションWS(北野地域)	2010/10/10, 11	日独交流和束町スケッチ会
2010/4/27	今宮祭りぬいぐるみ制作WS(西陣地域)	2010/10/17	新風館日独交流ライブペイント&嵐電日独交流会
2010/5/10~16	和束スケッチ展示(京都府庁)	2010/10/21~31	ドイツ若手作家グループ展(トランスポップギャラリー)
2010/5/15	特別美術講座 小田島等×大橋裕之	2010/10/25	影絵WS(テアトロ)
2010/5/18~6/21	和束スケッチ展示(和束茶カフェ)	2010/10/30, 31	アートバザールMITハンブルグ&アニメーション上映会
2010/6/5, 6	スケッチ会と茶摘み体験(和束町)	2010/11/	みんなの妖怪展(京福電車内)
2010/6/27	カッパ作品展示(京都エコセンター)	2010/11/17	秋の一般公開ぬいぐるみ制作WS(京都府庁)
2010/7/	会報紙「季刊」夏号	2010/11/28	スケッチ教室(京都府立植物園)
2010/8/7, 8	みんなのカッパ展&ぬいぐるみカッパ制作WS(日吉ダム光のアートイベント)	2010/12/5	岡山県立大学学生との倉敷スケッチ会
2010/8/10~15	和束スケッチ作品展示(大阪リーガロイヤルホテル)	2010/12/11	老人会の集いでバンド演奏会(旧西陣小学校)
2010/8/15	「みんなで妖怪を描こう」夏休み子供ライブペイントイベントIN京福嵐山駅	2010/12/11	特別美術講座 佐伯俊男
2010/8/23	夏休み工作教室開催(南山城村、笠置、和束町の小学生を対象)	2010/12/11	ぬいぐるみ制作WS(京都環境フェスティバル)
2010/9/	会報紙「季刊」秋号	2010/12/29~1/10	倉敷スケッチの展覧会(倉敷アイビースクエア)
2010/9/25	特別美術講座 逆住いみり(望月勝広)	2011/1/	会報紙「季刊」冬号
2010/10/2~17	日独交流展グループ展「MIT」&記念冊子発売	2011/2/	茶倉庫ギャラリー設置
2010/10/5	日独交流京福沿線スケッチ会	2011/3/2~7	ハンブルグの作家たちの和束スケッチ展(茶倉庫ギャラリー)
2010/10/6~17	カルティベーションパートナーズグループ展「ざわざわコレクション」	2011/3/	和束ハンドブック発売

図4 カルティベーション・パートナーズの活動